活水女子大学卒業式　祝辞

理事長・院長　湯口　隆司

2025 年 3 月 14 日

卒業される皆さんおめでとうございます。また保護者の方々にもご列席を賜り心から感謝申し上げます。大学生活がマスク着用、外食も減り、県外への旅行の制限など入学当時を思い起こすと、今では全ては懐かしい思い出になりました。コロナ禍は私たちに何を残したのかと最近よく思います。皆さんはいかがでしょうか。

生まれてから大学卒業まで、20 数年間のうち小学校から中学、高校、大学と教育の仕組みの中で皆さんは過ごしてきました。この 20 数年という期間で私が思いだすのはイエスの有名なたとえ話の一つ「タラントンのたとえ」(「マタイによる福音書」25 章 14 節から）です。

主人が旅に出かける際に、3 人の僕（しもべ）にそれぞれの力に応じて財産を 5 タラントン、2 タラントン、もう一人には 1 タラントンに分けて僕に預けて旅に出たのです。借り受けたお金ですから今日はそれを「元金」と呼びます。旅から主人が戻ると、5、及び 2 タラントンの財産を預けられた僕はその間に商売をして、それぞれ１０タラント、4 タラントンと元金を 2 倍に伸ばしました。一方 1 タラントンを託された僕は土の中に 1 タラントンを埋めたままにしました。

タラントンとは重さをはかる単位でしたがイエスの時代に貨幣の単位となり、今日の「タレント」(才能）の語源となりました。「それぞれの力に応じてタラントンを分けた」この聖書箇所が語源です。ローマ時代には 1 デナリオンと言う貨幣の単位があり、1 日分の労働賃金と同じ額です。1 タラントンとは 6,000 デナリオンに当たり約２０数年間の給与の総額になるという大金です。

さて旅からもどった主人はこの大金である 1 タラントンを土に埋めた僕に「怠け者の悪い僕だ。それなら、わたしの金を銀行に入れておくべきであった。そうしておけば、帰って

来たとき、利息付きで返してもらえたのに」と叱りました。

「タラントンのたとえ」は決して預金や国債、債券の購入 NISA のようなお金を増やすことを勧める話しではありません。20 数年後に戻った主人は、その間に僕が働いていればもう 1 タラントン分、合計 2 タラントンには最低なっていると期待しました。でも僕は主人を恐れ、損したら大変だと、大金を地面に埋めたのです。主人が戻るまでの 20 数年間、この僕は何をしていたのかと私も疑問を感じます。

「怠け者の悪い僕」とイエスが叱った本当の理由は何でしょう。2 倍に増やした僕に「お前は少しのものに忠実であったから、多くのものを管理させよう」とことばを掛けました。務めに忠実であること、怠けないことの称賛です。それだけでなく、主人は「それぞれの力に応じて」財産を預けたのです。そこには僕の能力への主人の信頼があったのです。

さて特に大学の卒業はこれまでの学校の卒業とは意味が異なります。カリキュラムやシラバスで予定した学びなどと異なり、選択肢を自分で決め、生活していくのが社会です。そのために皆さんは試験の準備や資格の取得、生きるためのスキルと知識の修得に励んできました。「タラントのたとえ」が卒業式にいつも連想するのはこのためです。

3 人の僕はもの大金を託され、持っていること自体恐怖も人一倍だったでしょう。元金を 2 倍にした僕と元金を隠して取っておいた僕の不安と恐れは共通ですが、大きな違いは、主人への信頼です。主人が「怠け者の悪い僕」と怒った訳は、大金を預かったことによる不安と恐れの気持ちが、主人への信頼よりも大きかった、そして僕は何もしなかったからです。能力に応じて主人は僕に託したにも関わらずです。主人はがっかりしたことでしょう。

現代でも米国のドル紙幣に「In God We Trust」と印刷されています。国の通貨は「信頼」（Trust）で成り立ちます。だから「同じ価値と考えられるもの」と交換できる、そして人と社会をつなぐ不可欠で素晴らしい発明品です。同時にお金は「欲望」を刺激し、使い方では人間の自由を奪う道具にも変ります。米国は最近「In Money We Trust」と最近は神を土

台の価値観である信頼や結束からモノとくにお金の信頼になっていると感じますが、欲望渦巻く大金が動く社会が現実としてあることはもちろんその通りです。

しかしお金で交換できない物が社会にはあります。人同士の信頼、幸せや、充実感、喜び、自己肯定感です。心の内にあるそこから湧き上がるものです。讃美歌 404 番の「泉となりて湧きあふる」もの、聖書の中で言われる「その人の内で泉となり、永遠の命に至る水」はお金（タラントン）で交換できないものです。タレント（才能）はタラントンと交換できません。米国の国家的行事で使われることが多いワシントン大聖堂で、今年 1 月下旬に大統領就任後の礼拝が行われました。聖公会のバッデ主教が「慈愛」をどんな人に対しても持つべきだという説教をしたことはキリスト教教会として勇気ある主張であり、お金でないものに価値を置く組織があることを表明した素晴らしい言葉でした。

希望をもち、相手を配慮し、そして感謝することは、人格どうしの「信頼」に根差したタレントです。そしてだれにも公平な時間が与えられています。

皆さんはこれからの社会人としての 20 年間を、神さまに信頼し歩む期間として、タラントンだけでなくタレントを 2 倍、それ以上に増やし、朽ちない財産をつみあげてください。

「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。どんなことにも感謝しなさい。」(テサロニケ一　5：16‐18)。人と神さまとの強い信頼関係を示すこの言葉は皆さんと将来の鍵となる言葉だと思います。神への信頼に基づき、恐れを打ち砕き、人生にチャレンジする旅立ちとなりますように。皆さんの先輩たちはそれを十分に示してきました。

新たな光が差し込むスタートです。神さまが共にあり、皆さんを導き守られるようにと祈ります。